

民族問題に関するレーニンの考え

①民族問題に関するレーニンの考え

シャウミャンあての手紙

1913年12月6日

拝啓 12月15日付のお手紙に、私は、非常に喜びました。

私のような立場にありますと、ロシアにいる同志からの反響がたいへん貴重に感じられることを、あなたはご存じにちがいありません。とくに考えぶかく、同じ問題にとりくんでいる同志の反響ならなおさらです。だから、あなたの早速のご返事は、私にとっては、とくにうれしかったのです。こういう手紙をうけると、おたがいの隔りがすくなくなつたように感じられます。けれども感傷は、たくさんです。本題にうつりましょう。

一 あなたは、ロシアで公用語をきめることに賛成しておられる。それは「必要である。それは、いままで、大きな進歩的意義をもってきたし、また将来も、もつであらう」と。私は、断然、それに同意しない。私は、このことについては、ずっとまえに『プラウダ』でも言っている〔本巻 375 ～ 378 ページ〕。そして、それは、いまのところ、まだ反論に出会っていない。あなたの論拠は、まったく、私を納得させてくれない、その反対だ。ロシア語が、多くのおくれた小民族にとって、進歩的意義をもっていたことは、争う余地がない。しかし、強制がなければ、ずっと大きな進歩的意義をもつたであろうということが、あなたには、わからないのだろうか？ 「公用語」は、ロシア語から人々をおっぱらう棍棒を意味しないだろうか？ あなたは、どうして、民族問題でとくにたいせつなこの心理を理解しようとししないのだろうか？ この心理は、ほんのすこしでも強制があれば、中央集権、大国家、単一の言語の争う余地のない進歩的意義をけがし、傷つけ、無にしまうのである。しかし経済は、心理よりも、いっそうたいせつである。ロシアには、ロシア語を必要なものとしている資本主義経済が、すでに存在している。ところが、あなたは、経済の力を信じないで、警察のならず者という松葉杖を経済の「支え」にしたいと、のぞんでおられるのか？ そうすることで、あなたが、経済をかたわにし、それを妨害していることが、あなたにはわからないのか？ 醜悪な警察政治の消滅は、ロシア語を保護し普及させる自由な団体を十倍（千倍）にふやさないだろうか？ いや、私は、あなたに、絶対に同意しない。そしてあなたを、プロシア王国政府社会主義という点で非難する。……

二 あなたは、自治に反対である。あなたは、地方の行政的自治にだけ賛成である。私は、断じて同意しない。中央集権は、けっして地方の「自由」を排除しない、というエンゲルスの説明〔第 17 巻、389 ページ〕を思いだしたまえ。どうして、ポーランドには自治をあたえ、カフカーズ、南ロシア、ウラルには、あたえないのか？ 自治の限界をきめるのは中央議会ではないか！ われわれは、無条件に、民主主義的中央集権制に賛成する。われわれは、連邦制に反対である。われわれは、ジロンド党に反対してジャコバン党に賛成する。しかし、ロシアで自治をこわがるとは……まったく、おかしい！ これは反動的だ。わたしに実例をあげてみせてくれたまえ。自治が有害となるかもしれないような実例を考えだしてみたまえ！ あげられまい。だが、行政的自治だけという、狭い解釈は、

ロシア（とプロシア）では、醜悪な警察政治をもってこいである。

三 「自治権は、分離の権利だけを意味するものではない。それは、また、連邦的結合の権利、自治の権利をも意味する」とあなたは書いておられる。私は、絶対に同意しない。それ〔自決権〕は、**連邦**を構成する権利を意味しない。連邦は、平等なものの結合体であり、**全体**の同意を必要とする結合体である。いったいどうして、**一方**のがわが他方のがわに自分への**同意を要求する権利**というものが、ありうるだろうか？ これは不合理である。われわれは 原則的に連邦制に反対する、——連邦制は、経済的結びつきを弱める。それは、単一の国家に役に立たない型である。分離したいというのか？ もし、経済的結合をやぶることができるなら、もっと正しくいえば、「共同生活」の圧迫と摩擦が、経済的結合を**そこない**、破壊するようなものであるなら、悪魔にくわれてしまえ、である。分離したくないというのか？ それなら、後生だから、**ひとにかわって**、事をきめないでもらいたい、連邦構成の「**権利**」をもっているなどと考えないでもらいたい。

では「自治の権利」はどうか？？ またしても、まちがっている。われわれは、**あらゆる部分**についての**自治に賛成**する。われわれは、分離の**権利**に賛成である（しかし、あらゆるものの**分離に賛成**ではない！）。自治制は民主国家を組織する**われわれの**計画である。分離はけっしてわれわれの計画ではない。われわれは、けっして分離を説きはしない。われわれは、一般的にいて、分離に反対である。しかし、われわれが、分離の**権利**に賛成するのは、黒百人組的、大ロシア人的民族主義を考慮したからである。この民族主義は諸民族の共同生活をひどく破壊したので、自由な**分離の**のちにこそ、しばしば**いっそう大きな**結合がえられるであろう！！

自決権は、中央集権というわれわれの一般的前提の**例外**である。この例外は、黒百人組的、大ロシア人的民族主義にたいしては無条件に必要である。そして、この例外をほんのすこしでも拒否することは日和見主義であり（たとえば、ローザ・ルクセンブルグに見られるように）、おろかにも黒百人組的、大ロシア人的民族主義を利することである。しかし、例外を、拡張解釈してはならない。ここには、**分離の権利**のほかにはなにもない。絶対になにもないし、またあってはならない。

私は、このことについて『プロスヴェシチェニエ』誌に書いています。私がこの論文を書きおわるころには（この雑誌の第三号にのるでしょう）、ぜひとも、私にもっとくわしいお手紙をください。私からも、もっとなにかをお送りしましょう。決議を通過させたのは、だれよりも、この私なのです。夏には、私は、民族問題にかんする講演をおこない、すこしばかりこの問題を研究しました。だから、私は「がんばろう」とおもっています。とはいっても、この問題をもっと多く、もっと長いあいだ研究してきた同志たちの言うことをきくのは、もちろんですが。

四 綱領の「修正」に反対——「民族綱領」に反対だって？？ ここでも、私は同意しない。あなたは、**言葉**をおそれている。言葉をおそれる必要はない。どうせ、**みんな**は、それ（綱領）を**内密に**、卑劣に、最悪の方向へ修正しているのだ。だがわれわれは、綱領を、その精神にもとづき、すなわち**首尾一貫した**民主主義の精神、マルクス主義的（反オーストリア的）精神にもとづいて定義し、精密化し、発展させ、確認しているのである、**こうすべきであったのだ**。いまのうちは、日和見主義（ブンド、解党派、ナロードニキ）の無頼漢にのさばらせておくがよい、——われわれの決議のなかで、とりあげられ、解決

されている、われわれの**すべての問題**に、おなじように**正確な**、おなじように**完全な**、彼ら**自身の解答**をださせるがよい。やるならやってみるがよい。いや、われわれは、日和見主義者に「降参」しなかった。われわれは、彼らを、**あらゆる点で粉碎した!**

——民族問題にかんする平易なパンフレットが、大いに必要です。書いてください。あなたのご返事をおまちします。かたい、かたい握手をおくります。みなさんによろしく。

あなたのヴェ・イ

第 19 卷 P538~541 『シャウミヤンあての手紙』

1913 年 11 月 23 日 (12 月 6 日) に執筆

②ロシア社会民主労働党の民族綱領について

「ポーランドのプロレタリアートが一つの国家の枠内でロシアのプロレタリアート全体とともに共同闘争をしようとのぞみ、これに反して、ポーランド社会の反動諸階級がロシアからのポーランドの分離をのぞみ、そして国民投票（住民全体にたいする質問）のさいにこれに賛成する大多数票をあつめるとしたら……どうしたらよいのか。われわれロシアの社会民主主義者は、中央議会でわがポーランドの同志だちとともに分離に**反対投票**をすべきか、それとも『自決権』を侵害しないために分離に**賛成投票**をすべきか?」。

こういう幼稚さ、こういう出口のない混乱に問題がゆだねられるなら、ほんとうにどうしたらよからうか?

親愛な解党主義者氏よ、自決権とは、まさに中央議会によってではなく、**分離しようとする少数民族**の議会により、セイムにより、国民投票によって、問題を解決することを意味する。ノルウェーがスウェーデンから分離したとき（1905 年に）、これを決定したのはノルウェー（スウェーデンの半分しかない）だけであった。

セムコフスキー氏がひどく混乱していることは、子供でもわかる。

「自決権」とは、一般に民主主義があるだけでなく、とくに分離の問題を**非民主主義的に解決**することが**ありえない**ような、民主主義制度を意味する。民主主義は、一般的に言えば、好戦的で抑圧的な民族主義と両立しうる。プロレタリアートが要求する民主主義は、民族の一つを強制的に一国家の領域内に引きとめておくことを**ゆるさない**ような民主主義である。だから、「自決権を侵害しないためには」、われわれは、明敏なセムコフスキー氏が考えているように「分離に賛成投票をする」のではなく、分離しようとする地方にこの問題を**自分で解決**させることに賛成投票をする義務があるのである。

おそらくは、セムコフスキー氏の知能をもってしても、「離婚の権利」が離婚にたいする**賛成投票**を必要としないということに気づくのに困難はなかろう! しかし、論理学のイロハをわすれるというのがもう、第九条の批判家たちの運命である。

ノルウェーがスウェーデンから分離したとき、スウェーデンのプロレタリアートが民族主義的小市民層に追従したくなければ、彼らは、スウェーデンの僧侶と地主が目標としていたノルウェーを強制的に併合しておくことに**反対投票**をし、またそれに反対の煽動をする**義務があったのだ**。これは明らかであって、大して理解に困難なことではない。スウェーデンの民族主義的民主主義派は、民族自決権の原則が強国の抑圧民族のプロレタリアー

トに要求する、こうした煽動を遂行することができなかった。

「反動派が大多数だったら、どうしたらよかろう」——とセムコフスキー氏は設問する。中学三年生にふさわしい質問ではある。民主的投票が反動派に過半数をあたえたとしたら、**ロシアの憲法**をどうしたらよかろうか？ セムコフスキー氏はくだらない、からっぽでのはずれな質問をだしている。——ばかも 7 人よれば 70 人の利口がこたえられないほどたくさん質問をだすことができる、ということわざがあるが、これはそういう質問の一つである。

反動派が民主的投票のもとで多数をしめるなら、一般的にはつぎの二つのうちのどちらかになるし、またなりうる。すなわち、反動派の決定が実現されて、その有害な諸結果が大衆を、反動派に反対して民主主義派のがわへ多かれすくなかれ急速におしやるか、それとも民主主義派と反動派との紛争が、民主主義のもとでも可能な国内戦その他の戦い（セムコフスキーのような連中でさえきつとこれについて聞いたことがある）によって解決されるか、どちらかであろう。

自決権を承認することは、「もっとも札つきのブルジョア民族主義に」「手をかすことだ」、とセムコフスキー氏は断言している。これは子供じみたたわごとだ。なぜなら、この**権利**を承認することは、分離に**反対する**宣伝と煽動をすることをも、ブルジョア民族主義を暴露することをも、すこしも排除するものではないからである。それにひきかえ、分離の権利を拒否することが、**もっとも札つきの大ロシア人的、黒百人組的民族主義**に「手をかすこと」だということは、まったく議論の余地がない。

被抑圧民族のブルジョア民族主義に手をかすことをおそれて、人々は、**抑圧民族のブルジョア民族主義**ばかりでなく、その**黒百人組的民族主義**にも手をかすということにこそ、ローザ・ルクセンブルグのこっけいな誤りの核心があり、このために、彼女はずっとまえに、ドイツの社会民主党内でも、ロシアの社会民主党（1903 年 8 月）内でも笑われたのである。

セムコフスキー氏が党史と党綱領との問題でこれほど処女のように純潔でなかったならば、彼はブレハーノフを論破することを自分の義務と考えたでもあろう。というのは、ブレハーノフは**11年まえに『ザリヤー』**で、ロシア社会民主労働党の綱領草案（1903 年から綱領となった）を擁護しながら、自決権の承認をとくに取りだして（38 ページ）これについてつぎのように書いたからである。

「この要求は——理論上からしてさえブルジョア民主主義者にとっては義務的でないが——われわれ社会民主主義者にとっては義務的である。もしわれわれがこのことをわすれるか、大ロシア人種のが同胞の民族的偏見にふれることをおそれて、これを表面におしだす決心がつかないとすれば、『万国の労働者、団結せよ！』という国際社会民主主義運動の戦いの呼びかけを、われわれが口にすることは恥ずべき虚言となるであろう」。

ブレハーノフはすでに『ザリヤー』で、会議の決議でくわしく展開された基本的な論拠をもちだしている。その論拠はセムコフスキー氏らが 11 年のあいだ注意をはらおうとしなかった論拠である。ロシアでは 43 %が大ロシア人であるが、大ロシア人的民族主義は人口の 57 %を支配し、すべての民族をおさえつけている。わが国では国権の自由主義者（ストルーヴェー派、進歩派等々）が民族主義的反動派とすでにいっしょになってしまっ

たし、また**民族主義的民主主義**の「最初の徴候」が現れている（1906年8月に、百姓の民族主義的偏見にたいして慎重な態度をとれと呼びかけたペシエホーフ氏を思いだしたまえ）。

ロシアでブルジョア民主主義革命がおわったと考えているのは解党派だけであるが、この革命の同伴者は、世界中のいたるところで民族運動であったし、いまもそうである。ロシアではまさに一連の辺境に、われわれは、近隣の諸国家では大きな自由をえている被抑圧諸民族を見る。ツァーリズムは近隣諸国家よりも反動的で、自由な経済的発展の**最大の**障害物となっており、全力をあげて大ロシア人の民族主義をあおりたてている。もちろん、マルクス主義者にとっては、**他の条件が同じなら**、大きな国家はつねに小さな国家よりもものぞましい。しかし、ツァーリ君主制のもとでの条件がすべてのヨーロッパ諸国や大多数のアジア諸国の条件と同じだという考えを許容するだけでもこっけいであり、反動的である。

だから、現代のロシアで民族自決権を否定することは、疑いない日和見主義であり、いまなお全能な黒百人組的、大ロシア人的民族主義との戦いを拒否することである。

第19巻 P586-590 『ロシア社会民主労働党の民族綱領について』
『ソツィアル-デモクラート』第32号、1913年12月15（28）日

ポイント

ロシア語が、多くのおくれた小民族にとって、進歩的意義をもっていたことは、争う余地がない。しかし、強制がなければ、ずっと大きな進歩的意義をもつたろうということが、あなたには、わからないのだろうか？ 「公用語」は、ロシア語から人々をおっぱらう棍棒を意味しないだろうか？ あなたは、どうして、民族問題でとくにたいせつなこの心理を理解しようとししないのだろうか？ この心理は、ほんのすこしでも強制があれば、中央集権、大国家、単一の言語の争う余地のない進歩的意義をけがし、傷つけ、無にしてしまうのである。

われわれは、無条件に、民主主義的中央集権制に賛成する。われわれは、連邦制に反対である。われわれは 原則的に連邦制に反対する、——連邦制は、経済的結びつきを弱める。それは、単一の国家に役に立たない型である。そして、われわれは、あらゆる部分にとっての自治に賛成する。われわれは、分離の権利に賛成である。この権利を承認することは、分離に反対する宣伝と煽動をすることをも、ブルジョア民族主義を暴露することをも、すこしも排除するものではない。それにひきかえ、分離の権利を拒否することは、もっとも札つきの大ロシア人的、黒百人組的民族主義に「手をかすこと」だ、ということはまったく議論の余地がない。

プロレタリアートが要求する民主主義は、民族の一つを強制的に一国家の領域内に引きとめておくことをゆるさないような民主主義である。だから、自治制は民主国家を組織するうえで必要である。けれども、分離はけっしてわれわれにとって必要ではない。われわれは、一般的にいて、分離に反対である。われわれは、けっして分離を説きはしない。しかし、われわれが、分離の権利に賛成するのは、黒百人組的、大ロシア人的民族主義を考慮したからである。この民族主義は諸民族の共同生活をひどく破壊したので、自由な分離ののちにこそ、しばしばいっそう大きな結合の可能性がある。